

# イチジク夏果新品種‘ザ・キング’の着果特性

上田 和幸・文室 政彦・沖嶋 秀史

イチジク夏果専用品種を導入することにより、収穫期の拡大、労働の分散および早期出荷による有利販売が期待できるが、夏果イチジクの生態や栽培管理技術は未解明な点が多い。そこで、夏果イチジク‘ザ・キング’の樹体管理法と樹体の生育および果実品質との関係について検討した。

## 1. 方法

農業試験場園芸分場植栽の樹勢がほぼ揃った‘ザ・キング’（Y字形整枝、植栽密度 列間2.5m×株間2.5m、4年生）12樹を供試した。

試験1. 収穫期および果実品質調査

試験2. 芽かきおよび摘心が果実品質および収穫果率に及ぼす影響

本数で1/2量の結果枝について結果枝先端芽（結果枝先端新梢）を下記のとおり処理した。

- 1) 芽かき
- 2) 摘心（新梢長約6cmで摘心）
- 3) 無処理

果径約3mmで夏果の着果を確認し、収穫時に果実品質および収穫果率を調査した。

試験3. 摘心および結果枝の誘引が果実品質および収穫果率に及ぼす影響

結果枝および結果枝先端の新梢を下記のとおり処理した。

- I区 新梢長約6cmの時点ですべての結果枝を誘引
- II区 新梢長約6cmで摘心し、すべての結果枝を誘引
- III区 新梢長約6cmで摘心し、摘心を行わなかった結果枝のみを誘引
- IV区 無処理

なお、摘心は本数で1/2量の結果枝についてその先端新梢に行った。果径約3mmで夏果の着果を確認し収穫時に果実品質および収穫果率を調査した。

## 2. 結果および考察

試験1.

(1) 1樹当たり収量は1.78kg、10a換算収量は285kgであった（表1）。

(2) 収穫開始期7月13日、収穫最盛期は7月20日収穫終期は7月26日であった。

(3) 果肉硬度と糖度との関係は果肉硬度0.0Lb. で平均糖度16.6、果肉硬度0.1Lb. 以下で14.7、0.2~0.3Lb. で13.5であった。果実を室温で保存した場合、果肉硬度0.1Lb. 以下で可食期間は1日未満、0.3Lb. 以下で2日未満であった（表2）。

試験2.

(4) 処理間で果実品質（平均果重・果径および平均糖度）に大差はみられなかったが、芽かきにより収穫果率が向上する傾向がみられた（表3）。

試験3.

(5) 処理間で果実品質（平均果重・果径および平均糖度）に大差はみられなかったが、誘引および新梢の摘心により収穫果率が向上する傾向がみられた（表4）。

以上の結果、1995年（結実初年）における‘ザ・キング’の収穫期は7月中旬から下旬にかけての約2週間であり、収穫期の判定は賞味期間も考慮すれば、果実が果梗部からやや下垂し始め、果皮の緑色が退色してやや黄色ががり、果実にかすかに弾力を感じる頃（果肉硬度0.3Lb. 程度）と思われた。なお、夏果イチジクは秋果イチジクと異なり前年生枝に着果させるため3年生の時点での収量性はきわめて低い、枝数の揃う4年生になれば収量性は改善されるものと考えられる。また、試験2および試験3の結果を総合して考察すれば、収穫率の向上には誘引の効果がより高いように考えられた。

表1 果実品質と収量

平均果重 (g)	果径 (mm)		平均果肉 硬 度 (L b.)	平均糖度	収 量 (kg/10 a)
	横径	縦径			
66.9	50.9	60.3	0.24	14.3	285

表2 果肉硬度と糖度および日持ち性との関係

果肉硬度(L b.)	平均糖度	室温での日持ち性
0.0	16.6	1日未満
0.1	14.7	1日未満
0.2	13.5	2日未満
0.3	13.5	2日未満

表3 芽かきおよび摘心と果実品質および収穫果率との関係

区 別	平均果重 (g)	果径 (mm)		平均糖度	収穫果率 (%)
		横径	縦径		
1)芽かき	63.1	59.9	49.0	14.6	76.9
2)摘心	69.2	64.1	51.8	14.4	53.0
3)無処理	66.9	57.4	50.9	14.5	55.3

表4 摘心および結果枝の誘引と果実品質および収穫果率との関係

区 別	平均果重 (g)	果径 (mm)		平均糖度	収穫果率 (%)
		横径	縦径		
I 区	69.5	64.7	51.1	15.1	76.7
II 区	66.8	61.6	51.3	13.6	80.6
III 区	66.6	62.2	51.5	13.5	76.2
IV 区	66.9	57.4	50.9	14.9	55.3